惜乎バルト教授

伊藤猷典

在獨石川謙氏より數日前小西先生の訃へ突如として、バルト氏の訃を報せる新聞の切拔を送られた。餘りに不意なのに小西先生も驚かれた。そは先生が先達ての外遊の際面會された時尙健在であり、其際に氏が氏の著書 Elemente der Erziehungs-und Unterrichtslehre が可なり自信のあるものであり、而して其全部又は一部が既に伊語、露語、西班牙語、瑞典語に譯されてるので日本語にも是非譯してほしい、誰か其人を求めてくれと云はれた光景が今尙瞭りと眼前に浮ぶからであらふ。自分が氏の名を初めて知つたのは今から八年前大學での購讀の際氏の著書敎育史を學んでからである。其後篠原君から前記敎育學要論の事を聞き、自分の奉職せる學校にての敎育學講義の參考に資した事屢々であつた。參考に資した度數はモイマン氏の Vorlesungen よりも此の方が遙かに多いかつた。氏は自分も可なりに崇拜せる學者の一人である。今此の人に逝かれる事は可なりに又痛事である。斯かる感を抱くものは單に自分だけではあるまい、聞けば日本から氏の敎を受くべく氏を賴りにして出帆された學徒が最近にも三名あるとか、此等三名の悲歎はどんなであらふ。

バルト氏に於ても氏が京都大學で小西先生が前記の書敎育史を敎育學講讀に使用されてゐる事を傳聞して居られた爲に、更に前記飜譯の事を話さん爲にか小西先生外遊の事を知られてより面會の

日を非常に待たれてゐたといふ事である。斯く待たれし事は今にして思へば所謂虫の知らせであつたのか。

自分は今哀悼の意を表する爲、前記新聞の切抜きを主として Schmidt, R.—Die Dentsche Philosophie der Gegenwart in Selbstdarstellungen. 1921 とを參考にして、氏の略歴、思想の前階並に主要な思想と其著書に就き梗概を記るさん。

一、略　歴

生死。一八五八年八日一日、シュレジエン、バルンタに生れ、本年九月三十日の朝、ライプチヒに於て心臓病の爲忽焉逝く。

學歴。ブレスラウのマグドナル人文中學を經て一八七五年より大學生々活を始めブレスラウにては古文辭學、歴史をライプチヒにて哲學其他を(詳しくは第二項に記す)學び、暫し教員生活の後更にライプチヒにて二ケ年間自然科學並に經濟學を學ぶ。

就職。一ケ年間軍隊生活の後、教師として一八八二—八三年の間ブレスラウのフリードリヒ人文中學に、一八八三—八六年の間リーグニッツの人文中學に一八八八七—八八年の間イエナに活動し、一八九〇年よりライプチヒ大學の教授たるべく止まり一八九七年に助教授となる。其後の年代に關しては不明なるも新聞の冒頭にライプチヒ大學哲學及び教育學正名譽教授、哲學研究所評議員としてある所を見ると最後は斯く昇進されたものと思はれる。

二、思想の前階　(但し一八九〇年迄)

氏の理想はライブニッツやヘーゲルの如く其の知識に於ては宇宙を包括し又は包括する如く見ゆる大哲學者にならんとするにあつた。そこで氏は

初め古語や古文學に多大の興味を有せし關係から大學にて古文辭學をやり且つそれをば歷史と見做してそれによりて過去の歷史の一部分を根本的に知らんとした。又他面中世並に近世史にも注意を拂つて歷史全般を知り以て存者（Seienden）の半分を知らんとした。後ライプチヒにて哲學の講義を聽いたペーゲルの歷史哲學の講義は充分に理解されなかつが、人間の發達全體を一形式に包攝せんとした努力がひどく氏を引付けた。其結果哲學上の講義はヴントに就てよりも寧ろ歷史家マックスハインツ（氏は此の敎授の助手であつた）に就て、本來の意味とは異つた意味で聞いた。又私講師リカッード・アベナリウスに就て認識論を學んだ。氏は又大學哲學會に負ふ所も非常なものであつた氏はすぐ其會員となり學生々活を終る迄續けた、其間研究會が熱心に行はれて、哲學に關するあらゆる問題、並に時事問題が論ぜられ、殊に氏を初め其他の學生に取りて好都合の事には先輩にモーリッツウィルト氏あり、氏は既に大人の域に達し隨て權威を有してゐた、其多方面の知識と論理の鋭さとは後輩をして益々奮發せしめた、後輩を導く事を己が任務とし、非常なる熱心を以て其爲に盡したのであつた。

バルト氏は其他バージルの編纂者「ローマ詩史」の著者オットーリッベックより言語學方法論と批評とを學んだ。氏の卒業論文はローマ劇作家に於ける不定法の使用に就てゞあつた。

敎育學に關しては、ブレスラウ、リーグニッツの兩所に於ける敎師としての生活が氏に對し敎育學上の研究に對し非常なる刺擊を與へた。氏は素人であつたけれども案內者を一度も取らなかつた。只氏の失敗によつて氏特有の獲物を得て喜ぶ事が出來た。氏はブレスラウにある四ケ年間に人文中學の各級を通して敎授した。又二ヶ年間は卒業試

驗委員になりなどして多大の教育的經驗を得た。氏は教職にありながら科學的研究を續け且哲學的に價値づけんとの希望を抱いて見たが其誤りなる事を知り教職をすてゝ斯學に專心にならんとしてライプチヒへ行き勉强をした。氏はイエナで再び一八八七—八八年間教職にありながら勉强せんとしたが兩者の一致し難きを痛切に感じ八年春ライプチヒへ歸つた。イヘナにある時氏は當時の人文中學校長グスタフ・リヒテル氏よりその人の手腕と人格とにより教育學上多大の經驗を得たと。ライプチヒにては二ケ年間自然科學（氏が先きに言へる存者の他の半分）と經濟學とを學び一八九〇年に Die Geschichtsphilosophie Hegels und der Hegelianer, ein Kritischer Versuch を書きて哲學教授となるべく此地に留まる事となつた。これを以て氏の思想の前階を終る。此れ迄に得た種々の思想と經驗が基底となりて爾後の思想の發展を助げるのである。

三、主要な學說と其著者

便宜の爲、哲學、社會學と教育學との二部門に別ちて述べやう。

イ　哲學、社會學說

前掲の「ヘーゲル並に其學徒の歷史哲學、批評的研究」の內容は詳にせざるも既に記せるシュミットの「現代哲學……」中に氏自身のものせるものゝ前後から判すると大體次の如くにヘーゲル哲學の缺陷を指摘したのでないかと思はれる。卽ちヘーゲルの說は片面的な觀念論的烏瞰にすぎない。一層深く歷史的過程を探索すれば人間は社會的本質である事、個々人でなくして全體に關係するものが歷史上の出來事である事、個人は全體と關係する時のみ問題となる事、從て社會の生活法則は同時に歷史の法則であり歷史の哲學は從て社會學と

關係する事等を知る事を得る。特にヘーグルは經濟的事實を看過した。例へば昔の國家の滅亡、其文化の滅亡の經濟的原因やグラックス家の世界史的意義に注意を拂はなかつた……と。

氏は古代の人々の精神、人格の偉大なるに感激し古グラックス家を詩的に表現せんとし悲劇、五幕物 Tiqerius Gracchus, 1892. を書いた。

之をものした理由は全國民に關する或る問題（其の內容は詳かにしないが階級鬪爭の問題でなき歟）がある、それには世界歷史的に同情ある人格者と世界歷史的危機とを劇にして一般に示す必要があると信じたからである。此の劇はウインの劇場理事が一八九九年二月に上演した、まじめな批評家は認めたが一般人には理解されなかつたやうである。

右の劇を書いた後の氏の注意の焦點は社會學にあつた。其研究の結果が Die Philosophie der Geschichte als Soziologie, I. Teil, Einleitung und Kritische Übersicht. 1897.

となつて表はれた。同書は一九〇〇年露語に譯された。

又一九一五年に大增補して第二版が出た。氏は第二版に於て主として批評的社會學史と社會學の課題（其對象の復雜なるが爲に哲學の課題よりも論爭の多い）を決定せんとしたのであつた。

氏に取ては社會學は歷史の科學なりしが故に歷史科學の本質問題にも觸れなければならなかつた此の點に關しては氏はリッケルトやディルタイの立場をばすてゝテーヌ（Hippolyte Taine）に左袒し政治的理想主義（Politischen Idealismus）てふ立場を取つた。詳言せば、氏は曰くチュルゴー以來自然科學と歷史科學とが分離され、ヴィンデルバンドは前者を法則定立的、後者を個性記述的學とし、リッケルトは價値を高唱し、歷史的法則を定

立せんとする社會學、同樣の事をなす歴史哲學は不可能である。歴史的法則とは本質上矛盾である從て歴史家は歴史の基礎としては、説明的自然科學たる如き心理學をすて他の心理學を採らねばならぬといつた。ディルタイはリッケルト氏よりも殆ど二〇年前に同樣の點に着眼し歴史家は記述的解剖的心理學をとらねばならぬとした。

ディルタイ、リッケルト兩氏の云ふ所は正しい。けれども斯かる歴史記述は學でなくて術である。藝術家が總てのものを表はさないで只自己の美と思ふもののみを表現する如く歴史家は總てを記述しないで重要と思はるゝものゝ主觀的評價から除外されないもののみを記述する。されど吾人は歴史穿鑿(Geschichtsforschung)と歴史記述(Geschichtsschreibung)と歴史科學(Geschichts wissenschaft)の三者を區別せねばならない。例之動物學に於て個々の動物を發見するのは穿鑿であり、動物の形態を記述し分類するのは記述である、それに進化論の説を應用して説明せんと試みるのは科學であり、自然穿鑿、自然記述、自然科學の三階段ある如くである。テーヌがコムトの影響を受けて第二段をすて第三段の立場を取り、個々人でなくして全體を眺め、一國民の間には一定の發達階段あり、その内に經驗的法則との一致を認めんとした事、動的のみならず靜的部分をも高唱した事は注意すべきでないか。ディルタイやリッケルトは此立場を否定した。けれども自分は之れを主張したいと思ふ。ホッブスが既に言へる如く社會は有機體である。シュワンが動物の細胞を發見してより單に外見上の比較のみならず内面的併行が唱へられた。有機體は云はゞ細胞の社會である。動物の體と人間社會とは「有機的體系」てふ同一類概念の下に包攝されうる。其種差は前者は其を統一するものが細胞であるに反し後者は人間の意志であ

る事である。從て社會は有機的特質を具へておる卽ち、(イ)各要素が聯結統一して妨害に對して當らんと努むる、(ロ)各要素は相互に影響しやう。(ハ)前代より後代への傳達は動物的有機體にありては生殖であるが人間社會にては敎育である。動物體は外から人間が手を加へなければ、進化、退化の一定の方則に從ふ事は何人も疑はない所である。此の方則は動物界全般に行はれる。故に精神界についても有機的生成生長退化ある事を辨明されうる。現象に斯かる適法的經過ある事を知つてこそ初めて未來への道を豫期し得るのである。此の豫徵こそは各種科學の目的であり、且歷史の對象、社會生活に取つては特に價値あり、重要なる事である。世界は野蠻より文明に進て行く、此の進步に對する歷史的に基礎づけられた信仰こそは要するに政治的理想主義こそは未來に向ての希望を意欲と行爲に對する一定の方向を與へうるのである。ディルタイは意志自由をすてかねて適法性を嫌つた。この嫌つた事は價値ある事であるが根據がない。ランプレヒトは他の歷史家に似ず獨り卓然として歷史の意味を基礎づけんとしたがそは空想に近きもので歷史的繼起の中核によつてゞはなかつた。

他面サンシモン、マスルク、エングルス等は唯物論を取つた、法律制度も所有財產も、國家の形式も、宗敎的、藝術的、哲學的理念も總て經濟的構造を基調として立つとした。が所有財產制の大原理は人の云ふ如く經濟的原因によらずして政治的原因によつておる。封建制度の起つたのは、あてがうべき官職がなかつたので止むなく土地を支配さしたのであつた。封建制度を破壞したものは經濟的の進步でなくして市民の平等、自由に對する理念であつた。宗敎改革の起つたのも、經濟的原因といふのは又マルクス、エングルス、カウツ

キー等の唱へる如く封建制度に向て市民の擡頭した事に伴ふ副現象と見るのは誤てゐる。若しそうだとすれは十三世紀に起つてゐなければならないそは寧ろ宗教史的發展に基くのである恰も支那に於て古典の宗教(そを孔子が集めた)より老子へ、印度に於て波羅門より佛教へ進化したと同樣である。又マルクスに從へは富の集中が行はれて少數の富有と多數の無産者を生じ之に階級闘爭を生ずといふも、獨逸の今回の改造を起した原因は富の集中ではなくして政治的のものであつた。吾人は知らねばならない、何故に政治家は黨派を作り國民間の爭を嫌はないかを、否、寧ろ一國民間(他國民よりも一層親しき關係にある)に於ける階級黨爭をば神聖な義務と見てゐる事を知らねばならない。唯物——寧ろ經濟史觀はかく缺陷はある。けれども歴史に於ける適法性を信じ歴史科學を作らんとした事を認めねばならない。然るに現代の歴史家が其事に注意せずして價値に基く歴史記述に止つてゐる云々と、

氏は又一八九九—一九〇一年迄は氏の率ひたDie Vierteljahrschrift fur wissenschaftliche Philosophie により、一九〇二—一九一六年迄は既に一八七六年より刊行されしDie vierteljahrschrift fur wissenschaftliche Philosophie und Soziologie を繼承刊行して獨逸國内へ社會學の普及を計つた。

哲學に關し氏の著書が猶一つある。即ちDie Stoa (Frommuns Klassiker der Philosophie, XVI) 1903 修訂增補第二版が一九〇八年に出ておる。

氏は曰くストアが若し基督教の爲に斥けられずにゐて中世國民の精神的指導者となり羅馬人の世界觀として獨逸へ移入されてゐたならば、どんなに世界は今と變つてゐたであらふ。恐らくは中世紀なるものは起らないで却て文化の一時期を劃し古代の科學藝術は新國民の若き力により新生命を

得、新飛躍を遂げたであらう。惜乎ストアは基督の爲に壓へられた。けれども文藝復興によりて再び世に出で西歐の文明を起した。何故ならば此學派は其體系中に自然の權利の理念を有してゐたからである。そは强者の權利ではない、一般平等の理想的權利とそれから必然に起つて來る平等の自由とである。其の根據は人間の精神は宇宙に遍在せる神的世界靈の一部である、そは肉體が生ずると來り死ぬと去る從て總ての人間は平等の根原を持つ、從て同胞である且何人も他人に比し豫め何者をも餘分に有しないからであると。卽ち基督敎が勢力を得る前二世紀に於て帝政時代の羅馬の法律家のストア學徒は自由と平等を法律中に有效ならしめんとしたのであつた。云々と、

ロ　敎　育　說

氏の敎育說は便宜上根本思想と、道德敎育說とを別つて述べよう。

敎育の根本思想

氏によれば敎育學は其目的を倫理學に其方法を心理學に求めるが猶其外に敎育は社會學と密接の關係を有する。何故ならば敎育は社會の傳達であるからである。勿論そが精神的なるは云ふ迄もない、社會は精神的有機體であり、只精神的にのみ傳達されうる。物理的傳達によりて得らるゝものは其材料にすぎない。

そこで氏は敎育學中に一面社會學的事實を發見し他面それによりて社會學的眞理性を有效ならしめんとした。

一方又十九世紀の後半以來大進步をなした實驗心理學並に現代哲學の確固たる要素に基き新に敎育學の體系を樹立し以てヘルバルト派の敎育學の缺を補はんとするにあつた。かくして生れたものが、Die Elemente der Erziehungs-und Untersichtslehre. Auf Grund der Psychologie und der

Philosophie der Gegenwart. 1. Aufl. Leipzig 1906.
である。氏は誇りかにモイマン氏の Vorlesungen zur Einführung in die experimentelle Pädagogik よりも早く世に出たと明記してゐる。該書は昨年第七、第八版が出で、一九〇九年に、伊太利語に一九一三年に露西亞語に、一九一四年に西班牙語に、一九一六年に瑞典語に譯されて出版された。

此書の主要點は從來の悲觀的見解に反對して、心理學の事實に基き教育の可能力を再び信頼し得る事、特に意志を鍛練すべき事、近來兒童の自發意志を過度に尊重する事は危險であり且遂には力のないものとなる恐ある事、感情生活は從來よりも一層注意すべき事、注意の習慣をもつと作る事宗教々授とか歴史教授の如き現在獨逸に行はる各科の授業は根本的に改造を要する事などである。

教育が社會の傳達であるとすれば教育史は社會史に準するのが當然である。此意味に於て氏が著したのが、

Die Geschichte der Erziehung in soziologischer und geistigesgeschichtlicher Beleuchtung. 1. Aufl. 1911.

である。修訂增補されて第三版、第四版が一九二〇年に出た。

氏は此書に於て教育の根原を社會の自然形式に於て示し、且教育の變化が社會の變化と並行せる事を示さんとした。社會内の精神運動が如何に教育に影響するかを文藝復興、宗教改革、啓蒙時代の例によりて示し、別して啓蒙時代に關しては從來充分に説かれてなかつたので特に注意を拂つた啓蒙時代は單に「人間を自ら作せる未熟から拔出さす」(カント)てふ消極的課程のみならず却て積極的な組織例へば、自然宗教、自然權利、自然的倫理(カッバーランド、スピノッァ、シャフツベリー)、經濟上の自然的自由(アダムスミス)等を生じた。

此積極的精神からラトケの格言「萬事自然の秩序に從へ」(Omnia juxta methodum naturae!) を以て獨逸國に初つた所謂「自然に從ふ」教育學が出た。自然と理性とは啓蒙期には同等の價値であつた。ラトケの此要求はコメニウス、ロック、ルッソウ、バセドウ及其學徒、並にペスタロッチーによりて一層擴められ且一層深き根據を得た。啓蒙時代の教育學はペスタロッチを除けば他は本質上個人主義的であつた。恰度其當時に唱へられた自然權利やそれから演繹された經濟上の「自然的自由」、經濟的自由主義が個人主義的であつたと同樣である。けれども十九世紀の後半になり國民經濟に於ては最早個人主義は維持され難くなり、反對運動として社會主義が起り、個人主義に社會的制限を加へんとするに到つた。それと同時に教育に於ても新說が起つた卽ち社會的教育學である。斯くの如く社會運動と教育の傾向とが相卽不離の關係を有する事を隨所に發見し得るのであると。

道德教育

氏の說の中核は舊來の宗教々授の立場を捨てゝ宗教に加ふるに更に哲學を以てするのであつた。曰く。兒童の住む社會の同胞の有する世界觀や人世觀が總て一致して居る社會では道德教育は到て容易である。學校で習つた道德律は社會へ出てからも其儘用ゐられて周圍と矛盾する事はないからであるけれども獨逸の社會ではそれと趣きを異にしておる。獨逸に於ては雜多の世界觀があつて調和しない。古宗教信條、自然宗教の餘韻、自然科學的唯物論、唯物史觀、生物學より發達せる進化論、等各々鎬を削りて高唱され、爲に青年は其去就に迷はされてゐる。然るに公立學校では十六世紀其儘の信條を教へて生活規整の根據としてゐる、なる程こは農家で昔ながらの生活樣式、宗教、道德が遺つてゐる所では通用するが、工業社會で、

新作業法、新生活樣式、新理想の行はるゝ社會へ入ると忽ち周圍の批判にあつて覆され、該問題に就て疑惑を生じ、遂に丁度青年の危期に際し、光明ある指導的道德理想を缺くに到る。故に道德敎育は從來の立場とは異つた立場をとらねばならない、意見は區々に分れようとも人間の道德は確かに如何なる意見をも斥けはしない。若し缺くる所ありとする時それは其責を、それを要すべかりし他のものに歸せるが然しその責を自負しようとはしない。其故に吾人は一の倫理的體系を建てうる、それが將來兒童の精神から出ても差支へない。然し倫理學は一定の世界觀に立ち其命令を基礎づけねばならない。而して今や宗敎は總ての力を支配するの力なき故に其基礎となる事は出來ない。基礎となるものは哲學である。

斯く言へば世人は抗言するであらふ。哲學體系が多樣であると同樣に倫理の體系も多樣であつて一般に義務づけられるような組織はない、各哲學はそれ特有の倫理を持てゐる、修身の敎師は何れに從ふべきかと。だが一層精密に調ふれは其の多樣性は漸次滅して遂には一致する。古代の倫理學組織はストア、スピノサ、カントの組織であり、三者は同一の最高目的——强き意志と社會意志を立てゝおる。此兩目的は倫理の敎師に取て矛盾なく敎へられうる。又何故に吾人は倫理目的を追求し、道德命令に從はねばならぬかといふ問ひに對する答の根據は種々雜多であらふ。然し其の答の多樣な事は敎育に取ては不利益といふよりは寧ろ利益である。哲學は其體系の統一の爲に倫理的動機も亦統一を要するが、敎育では甲でいけなければ乙でやるといふ具合に種々の動機を妥當せしめ得るからである。例へばカントの說を敎へて善は只善の法則の爲に存すべしと云ひうるも氏に倣ひて幸福を求める事を止めよといふを要しない、何

故ならば義務を充す事は同時にシルレルの理想として掲げた幸福である事はありうるからである。又教師は道德は進化の法則に適合し從て自然の意志、神の意志に從ひうるが不道德は之と矛盾し、必然的に罰を受け、不幸を招かねばならぬと說き得る。只一事を卽ち相矛盾する原理を同時に說く事を止めねばならない。例之、スピノサが要求した生きんとする强き意志を採用すると同時にショウペンハウエルの意志の否定說を辯護する事は出來ない。ポウロに從て人間の意志の救ふべからざる弱さや原罪をときながら强き意志を要求する事は矛盾である。原罪說を避くべからざるものとせば基督敎徒の持つべき、且結局は意志の特質たる確固たる信念を示さねばならぬと。

以上の問題についてのべたのが次の二書である。

Die Notwendrgkeit eines systematischen Moralunterricht. 2 aufl. 1920

Ethische Jugendführung (Grundzüge zu einem systematischen Moralunterricht 1919.

である。猶ほ

Der Lebensführer. 2.Aufl. 1920.

に於て、小學校の最上級、並に補習學校に於て用ゐらるべき道德敎授の階梯を書いた。

氏は勿論宗敎々授を公立學校から除外せねばならぬとは信じない。宗敎は其最高表現に於ては、科學的哲學的倫理學が求めんとする永久價値の感情である。完全なる道德組織其物は宗敎なしではありえない。勿論宗敎は道德の根底ではないが其の極所である。道德命令其物は生命の實現から生ずる。生命を欲するものは道德を最高生活力として欲せねばならない。世界全體が道德の上に立てらるゝ時世界の根原は道德的であり從て神性である。

かくてプラトー、シャフツベリー、カント、ゲーテ、は元よりスピノサすらも宗教に來るのである。かくして最後に最高感情と最高認識とは一致すると。

更に哲學の必要を説いて曰く。世界大戰は歐洲の國家經濟を破壞し、剩へ舊來の權威を轉覆した轉覆されなかつたものが唯一つある。即ち科學である。從て科學は世界改造の最有力の槓杆である諸科學は互にもつと接觸せねばならない、そして科學の綜合たる、極所たる哲學は生命の意味方向を決定せねばならない。哲學者と宗教家は相提携しなければならない。宗教が啓示によりてなす如く哲學は思索の光によりて明哲と慰安と信念とを將來し且嘗てフィヒテの云へる如く、人間の本質は活動なる事を教へねばならない。此活動中に社會和合の重要なる契機が存する。何故ならば活動は創造者の喜びであり其仕事の結果は他の爲になり從て自他の利害關係中に存する乖離を無くする從て科學と勤勞は吾人を脅畏する幾多の痛苦を吾人の爲に除いてくれるであらふ……と。

道德教育に關する著書としては前記三種の外に氏の編纂したものとして、

Moral padagogik. 1921

といふのがあるが之は氏一人の著述でなくて一九二一年四月一日から五月三十日迄の間、ライプチヒに於て開催された第一回獨逸道德教育會議に於て氏を初めとして、ルードウィヒ・グリム氏、ヨーナス・コーン氏、ペンチヒ氏、オットー・エルラー氏等によりてものされたものを蒐錄したものである。其中に於て氏は具案的道德教育の必要を論じてゐる。

粗略ながら氏の思想の大要を書き盡したつもりである。終りに臨で一言附け加へておきたい。即ち氏の説は詳細に檢覈せば破綻も生ずるであらふ

社會有機體說や殊に道德敎育の如き後人の追窮すべき問題は猶多數殘されてある感がする。けれども氏が歷史哲學に於て歷史的洞察の鋭かりし事ディルタイ、リッケルト、テーヌ、マルクス等の長を取りて獨自の立場を作りし如き、ストア哲學の隱れたる長所を世に紹介せる如き、別して敎育學に於てモイマンの發表以前にありてモイマンの如き偏面的態度に出でずして而も我等敎育家にとつてモイマンよりも一層便宜なものを提供してくれた事、道德敎育に關してヒントを與へてくれた事等は永久に記念すべき效績ではあるまい歟。

聊か行蹟を記して氏の靈に捧ぐ。（十一月廿日）